

平成から令和に元号が改元され、振り返れば富山は何かと注目される一年でした。

★まずは【大相撲】春場所・五月二十五日、令和最初の優勝は、富山出身の朝乃山英樹（あさのやまひでき）が飾りました。おまけに内閣総理大臣杯は約五十年前に富山県出身の銀器職人らが制作されたことにも注目が集まりました。制作に携わった職人らは「富山県出身の力士に手渡されたことを誇りに思う」と喜びを語った。目に見えない因縁を感じました。★お次は六月二十日、【NBA】アメリカプロバスケットボールのドラフト会議で日本人初となる一巡目指名を受けた八村塁（はちむらうい）21歳 選手。

★更に、【令和元号】中西進先生は「令和」元号の発案者。東京出身ではありませんが、富山在住で高志の国文学館館長。等々。富山県では嬉しいニュースが多く飛びかいました。また、ラグビーワールドカップ二〇一九では、日本代表選手のご活躍が世間を賑わしました。実は、私は一試合も観戦できず・・・残念でしたが、試合の盛り上がりも去る事ながら、私の耳に心地よい響きが聞こえてきました。それが『ワンチーム (One Team)』という合言葉です。この言葉からは、何か見えない壁を越えて、『皆が一つ。皆で一つ。全体が私。』ここで使われる意味合いは多少違つたのかもしれませんが、私自

身そういった想いとして受け取った名台詞でした。

◆《希求されるリーダーの存在》

『ワンチーム』という思いの柱があれば、皆で同じ方向を向いて歩みを進められるものと思います。世の中に様々な『グループ(組織)』はいくつもありますが、向かう方向が統一されていない『グループ』も多く見受けられます。それは『グループ』という単なる集まりでしかない集合体になり下がっていることが多いのではないかと思っています。一方の『チーム (Team)』には、リーダーという存在がいます。もちろんグループにもいるのですが、確固たる柱という信念を備えたリーダーとは言い難いのではないかと思っています。

例えば今年の十月、神戸市の公立東須磨小学校で同僚の教職員同士のイジメ問題が発覚しました。嫌がる二十代の男性教師を羽交ひ締めにして、激辛カレーを無理矢理食べさせる。新車を蹴ったり、車内でわざと飲み物をこぼしたり、車の屋根に乗ったり・・・とても教師の所業とは思えない幼稚で卑劣なイジメでした。

この学校教師のリーダーは本来、校長先生であるはず。ところが、その学校での勤務経験日数が長いというだけの一女性教師が、リーダーであるはずの校長先生よりも発言力があり、学校のことを把握していたという現状があったそうで、教師間のパワーバランスが取れない状況の中で、校長先生はイジメを容認せざるをえない現実があったのではないかと思います。かつてPTA会長を務めていたときにも驚かされることが多々ありましたが、先生と親御さんの

パワーバランスが完全に崩れているということに愕然とした事を思い出しました。俗に言うモンスターペアレントです。挙げれば切りが無いのですが、いずれにしても「リーダー不在が叫ばれて久しい。勤務先や会社など、地域社会の中での組織にリーダーは必要ですが、それ以前に夫婦間、親子間などの家族間にもリーダーがいない事にも危惧しています。小さくは家族間、大きくは行政間でのリーダーの存在が希求されます。

◆《リーダーは象徴》

日本のリーダーだけは揺るぎなく、神武天皇を起源とすると、二千六百七十年以上も男系の子孫がずっと皇位を継承されておられる天皇陛下の御存在です。天皇皇后両陛下は言うまでもなく「日本の誇り」です。日本人の精神性の原点であり、最も象徴的なのが天皇陛下であられます。御即位あそばされた令和の今上陛下は初代が神武天皇から数えて実に百二十六代。世界に冠する唯一無二の御存在であられる天皇皇后両陛下は、その御存在そのものが、長い歴史や伝統の中で我々がずっと引き継いできた日本そのものであります。

◆《民の幸せを祈つて…まさに道場》

ここでは、三十一年という長きに亘った平成年間を振り返り、『平成天皇皇后両陛下』のご活動を紹介させていただきます。とは言え、私も見聞した内容でしかありませんが、マスコミが取り上げない内容だけに、ぜひ一読頂き、深く心に留め置かれますれば幸いです。

まず、天皇皇后両陛下のご活動は激務の一言です。両陛下は毎朝六時にはお目覚め

になり、お二方で吹上御苑(ふきあげぎょえん)の森の中を散歩。一年を通じて毎朝のお目覚め時間を変えないという規律を自らに課しておられる。まず午前中、宮中三殿で宮中祭祀(さいし)を執り行われた後、午後は宮殿に行かれて社会福祉関係者の拝謁(へいぎやく)や認証官任命式(くにむすび)などの官吏を任命し、辞令を交付する儀式(ぎし)があります。その後、新しく着任した外国大使夫妻のためにお茶会をなさり、夜は御所で、近く訪問予定の国の歴史について学者の話をお聴きになる。通常、夜十時半が御格子(みこうし)：陛下が御寝(おしずまり)になること)となつていますが、大抵両陛下はそれ以後も、翌日の行事の為の資料や式典で読まれるお言葉の原稿に目を通したり、外国の国王王妃にお手紙を書かれたりされているようです。朝から晩まで次々と性質の異なるお仕事に取り組みされており、それが一年を通じて続く。大きな行事や式典は、休日や祝日に行われる事が多いため、五日働いて二日休むという生活のリズムもない。公務に邁進される陛下の根底にあるものは、「国民のために」という思いがおりになる。

陛下のその思いが一つの形として具現化される場が「宮中祭祀」。これは陛下が国家国民の安寧と繁栄をお祈りになる儀式。陛下の一年は元旦朝五時半から執り行われる「四方拝(しほうはい)」で始まる。外は真っ暗、しんしんと冷えている中、白い装束を身にまとひ、神嘉殿(しんかでん)の前庭に敷かれた畳の上に正座され、伊勢神宮を始め四方の神々に拝礼(らいらい)される。その後、宮中三殿に移られ歳旦祭(さいたんさい)を執り行われる。宮中三殿とは賢所(けんじょ)：皇霊殿(こうれいでん)、神殿(かみだま)の総称で、それぞれ天照大神、歴代天皇と皇族の御霊、八百万の

神々が祀られている。そこで五穀豊穰や国民の幸福をお祈りになられる。陛下が執り行われる宮中祭祀は年間二十回程度あるようですが、その中で最も重要とされる祭祀が十一月二十三日の「新嘗祭(にいなめさい)」です。その年に収穫された農産物や海産物を神々にお供えになり、神恩を感謝された後、陛下自らもお召し上がりになる。夜六時〜八時までと夜十一時〜深夜一時までの二回、計四時間にわたって執り行われ、その間、陛下はずっと正座で儀式に臨まれます。陛下は「足が痺しびれるとか痛いと思ふことは一種の雑念であって、神様と向き合っている時に雑念が入るのはよくない。澄んだ心で神様にお祈りするために、普段から正座で過している」とお応えになっておられます。元旦の「四方拝」・「歳旦祭」に始まり、春分の日「春期皇霊祭」、秋分の日「秋季皇霊祭」、天皇誕生日の「天長祭」など、宮中祭祀の多くは国民の祝日に行われています。つまり私達が休んでいる時に、陛下は国民の幸福をお祈りされておられる。

御即位十年の記者会見で「障害者や高齢者(中略)に心を寄せていくことは、私共の大切な努めであると思います」と仰っているように、両陛下は各地を訪ねられる際、最低でも一ヶ所は近辺の老人ホームや障害者施設、保育所などの福祉施設に足を運ばれています。平成に入ってから子供の日、敬老の日、障害者の日(現在は障害者週間)に毎年それぞれ関係のある施設を訪ねられる。これまで実際にお訪ねになった福祉施設の数是国内だけでも五百を超えているそうです。加えて、災害のお見舞い。両陛下が平成になって初めて大災害のお見舞いに行かれたのは、平成三(一九九二)年の雲仙普賢岳

噴火(うんぜんふげんだけふんか)の時でした。その時から現在まで一貫して変わらないのは、避難所をお訪ねになり、床に膝をついて一人一人の被災者と丁寧(ていねい)に話しておられる両陛下のお姿です。両陛下は大災害の時だけでなく国民のことを心配されているのではありません。日本は自然災害の多い国だから、台風や地震、川の氾濫(はんらん)などしょっちゅう起ります。その度に、どこの誰がどういう被害を受けたかという事を心にかけておられる。陛下はいつ、いかなる時も国民の安全や幸福を第一にお考えになっておられます。両陛下は、決して物事を蔑ろにしたり、いい加減にしたりなさらない。陛下のご公務の一つに、閣議で決まった法律や条約の批准書(じゅんしゅ)などを認証(にんじ)なさるといふ国事行為(こくじけいゐ)があります。閣議が終わると内閣の事務官が分厚い書類を入れた箱を陛下にお渡しする。陛下は全て御覧(ごらん)になって、署名(しよめい)や捺印(なつしん)をされる。その膨大な書類の一つ一つにキチンと目を通され、分からない事があると質問(しつもん)なさる事もあるそうです。両陛下のその姿勢は多くの外国人にも強い印象を与えている。常に本気で質問をなさり、本気で話を聞いておられる。もう一つは非常に勤勉(けんべん)であられる。那須(のす)の邸(てい)にご静養(じやうやう)に行かれても、必ず近くの農家を見に行くと仰って、農家の人々を激励(げきし)されているそうです。

「日本国憲法で、天皇は日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴であると規定されている。この規定は、国民の幸せを常に願っていた天皇陛下の歴史に思いを致し、国と国民のために尽くす事が天皇の務めであると思つています」と。これは平成十(一九九八)年の天皇誕生日での記者会見の席で、天皇の務めは何かという質問に対して陛下が仰

つたお言葉です。その上で、「象徴として最も相応しくあるためにはどうすればいいかという事を日々模索(もさく)しながら今日までやってきました。私に言える事はそれだけです」と。

常に国家国民の真の幸福を願われ、絶え間なく働かれています両陛下のご日常は、まさに道場(だうじやう)といえます。両陛下の御存在は、我等日本国民にとつて、いや世界においても、紛れもなく象徴(しやうてい)であり、誇りであると言えましよう。そして私達は私達に与えられている道場を歩むという使命がある事に思いを致しましよう。

◆《ブツダ最後の説法は?》

台風を始めとする天変地異の猛威を思い知らされた一年でもありました。大きな天変地異を経験すると、それまで何の疑いもなく生きて来た人生観が、根底から揺さぶられます。自然の権威は、人間が作り出した文明という名の快適な生活を、一瞬にして破壊してしまいました。「人間の作る文明社会とは、まるで映画のセットのようにもろいものだな」と痛感(いたかん)させられました。今更ながら、自然は人間の尺度(しゆく)や予想など全く意(い)に介(か)さない、無情(むじやう)なものであることを痛感(いたかん)します。人間の思い(こころ)を捨て、無情(むじやう)な、あるがままの自然の摂理(せつり)に素直(すじく)に従(したが)うところに、非力(ひりき)な自分(自分)の存在(そんざい)を感じる事ができますし、「生かされていること」も知(し)ることができま

す。ブツダ最後の説法は、「自らを灯明とし、自らをよほどことせよ(自帰依自灯明(じきぎよじとうみょう))です。いかに不条理(ふていり)で絶望(ぜつぼう)的な環境(かんげい)にあつても、自らが灯明となつて光(ひかり)を投げかけ、環境(かんげい)を救(す)わんとする主体性(たいていせい)こそ人間の尊厳(そんげん)があることを、天

皇皇后両陛下がそうであるように、多くの被災された人達やボランティアの皆さんが身をもって示されました。私達の心は、いつも、あなたと共にあります。まさに『ワンチーム』。ブツダも仰る(おほ)るように、一人一人が自分らを灯明として自覚(じかく)し、その自立した人間同士の連帯(れんたい)により、今このリアルな課題(かだん)に取り組み(とくみ)、それぞれの環境(かんげい)を救い、より良くしていこうとする途上(とじやう)にある限り、いつでも私達の心は被災地(ひさいち)で困難(くわんなん)に耐えながら頑張(がんば)っている人達(ひと)と共にあるのだと思(おも)います。

伝教大師・最澄(でんきやうだいしさいしやう)が「一隅(いちこく)を照らす、これすなわち国王(こわう)なり」と喝破(くわつぱ)されたように、自分自身が灯明であると自覚(じかく)して生きる人は皆(みな)素晴らしい「国宝(こくたう)」なのです。

私達人間の理屈(りくつ)で説明(せつめい)できるほど、大宇宙(おほそぞう)はそんなちっぽけな見(み)に収(こ)まることはありません。仏教(ぶつぎやう)で言えば「南無(なんぶ)の心」です。南無(なんぶ)とは、帰依(きい)する。信頼(しんらい)するということです。世界の象徴(しやうてい)である天皇陛下(てんかうへいか)のご活動(ごかつどう)の根幹(こんかん)は「祈り(いのち)」です。つまり「南無(なんぶ)の心」と言(い)えます。

目に見えない物事を疎(そ)かにしがちな現代社会(げんたいしやかい)にあつて、実はそこにこそ大切なものがあることに気が付き、自らが自灯明(じとうめい)として日々の生活(せいかつ)を送(おく)るその時、あなたはリーダーとしての光(ひかり)を放(はな)つているものと思(おも)います。そんな人が一人また一人と出現(しゆげん)してくださる世(よ)の中でこそ、互(たが)いに補(おぎな)い合(あ)える、依存(いそん)とはほど遠(とほ)い、支(たす)え合(あ)いの社会(しやかい)「ワンチーム」な世(よ)の中(なか)へと変革(へんかく)していけるのではないかと思(おも)っています。間もなく今年(ことし)も終わりを告(つ)げようとしています。来たる年(とし)に向けて、皆さまの『いのちへ合掌(がしやう)』